

江上の船（嵯峨天皇）

一道の長江千里に通ず

漫々たる流水行船を濛わす

風帆遠く没す虚無の裡

疑うらくは是れ仙查の天に上らんと欲するかと

一道長江通千里 漫漫流水濛行船
風帆遠没虚無裡 疑是仙查欲上天

解説 河陽（現在の山崎付近）の離宮から、淀川上の帆船をご覧になり、その船の速さを述べられた詩である。

語釈 ※江川。ここでは淀川をさす。※一道一すじの道。※長江長い川。※千里非常に長いこと。※漫々水の流れが広いさま。※行船川を進み行く船。※濛水に浮かんで進む意。※風帆風を一杯に受けて大きく孕んだ帆。※虚無空虚。何も無いところ。※疑是は「〜ではないかと思われる。」「仙查」仙人の乗りたいかだ。

通釈 河陽の離宮から見ると、淀川が千里のかなたまで続くかのように流れている。その川の広く豊かな水の流れに、行きかう船を浮かべている。これらの船々の風を孕んで矢のように速く、遠く遙かなたに消えゆく光景は、まるで仙人の乗りたいかだが、天に上るさまかと思われる。